

隣人妻の素顔は、雨宿りの夜だけのもの

姉御肌の隣人妻が、盛夏の雨宿りで距離を縮める——凜とした彼女が信頼した相手にだけ委ねる落差

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

由芽は、雨に濡れたままこの部屋へと現れただけでさえも、まるで誰かの所有物を確認しに来たように堂々としていた。湿った空気が広間に立ち込め、冷たい風が襖の隙間から忍び込んでくるが、彼女はそれを気にすることもなく、ただその存在だけで空間を支配していた。主人である健吾の視線はその背中に釘付けになるが、由芽はふっと肩を落とし、ゆっくりと息遣いを乱しながら立ち上がった。その動きには、普段なら見せないような緊張と、同時に抑えきれぬ焦燥感が滲み出ている。盛夏の雨宿りに相応しい涼しさなのに、彼女の肌からは蒸発するかのような熱気が漂う。それは、単なる気候の変化によるものではない。日々の生活の中で培われた主従関係という名の慣例が、次第に薄らいだことで露呈した、本能的な渴望の予感だった。

健吾は机に向かって手を動かしているようだが、実際は何も書いていない。そこには彼女への期待と、それに対する畏怖が混ざり合っている。由芽は彼の膝元へ降りていくが、距離は僅か二寸ほど。それでも二人の呼吸は重なり合うように迫ってくる。「久しぶりね」と呟く声が、乾いた室

内で反響して耳障りなまでに響く。それはいつもの甘々とした妻としての囁きとは異なり、どこか喉奥から絞り出すような、肉体的欲求を満たしたいとの切実さを含んでいた。由芽の手が彼の太い腕に触れる。指先が汗ばんだ彼のスラックスの裾を捉える感触は、冷たい雨粒よりも遥かに刺激的だった。

「また、私のこと忘れてたわ」

その言葉には責められているような響きが込められていた。彼女は彼の顔を上げ、湿った髪を額につけている前髪を整えながら、自分の唇を噛み締める。由芽の視線は彼の内側へと深く潜っていくようだ。そこには、単なる知性の交差点を超えて、肉体同士が擦れ合うことで生じる摩擦のような感覚が既に孕まれている。盛夏の雨という不条理な舞台が、二人の関係に新たな潤滑油となって働きかけているかのようである。普段は静かで計算高い主従関係が、この異常気象によって解け始めている。彼女が放つ熱気が、健吾の背筋を這うように伝わり、全身を震わせるほどだ。

中盤へと話は移ると、情景は次第に現実離れした夢見心地へ変貌していく。『――』で括られたこの一夜は、それまで積み重ねてきた常識的な距離感を無効化し、純粋な本能だけが暴走する領域への扉を開くようなものだった。由芽が再び動き出し、彼の胸元へと手を探り込む。指先がシャ

ツの繊維を抉るようにして肌を撫でる感触、そしてそこに伴う微弱だが確かな体温の変化。それは、言葉では説明できないほどの官能的な電流が二人の間を行き来している証拠だった。「もっと近付いて」という彼女の指示が、まるで命令であり、同時に甘やかしでもあるかのように響く。

会話の中に込められた意味深長なニュアンスは、二人の過去や将来などという些細なことを忘れさせるのに十分だった。雨音だけが時折、室内の密閉された空間から漏れるような、不気味なまでの集中力。由芽が彼の肩を押しつけ、その重みが彼を支えつつも、ゆっくりと崩壊させようとしているかのようなのだ。彼女の内側には、普段は隠していた野性味が蠢いている。主従関係という名の枠組みの中で、彼女は主人である健吾へと完全なる支配権を移譲しつつあり、その行為自体が一種の儀式として執り行われている。

このまま時間が経てば、理性は次第に溶けていくだろう。盛夏の日差しさえも、窓ガラス越しに射し込んだ熱によって部屋中を蒸発させ、二人を閉じ込める蒸風呂のような感覚に陥っている。由芽の唇が緩み、息遣いが荒くなるにつれ、健吾自身の感覚も麻痺寸前へと追い込まれていく。『――』で切り取られたこの瞬間は、単なる余興ではなく、二人の運命が交錯する決定的なポイントだった。最後

に由芽が耳元へ囁く言葉は、意味のある単語よりもむしろ、喉の奥からの低鳴きに似ていた。それは、これから訪れる高揚感への序章であり、最も濃い夜の只中に突入するための最後の準備作業だった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——